

# 唐招提寺の組法具について

\* 羽 良 朝 風

## 要 旨

唐招提寺の金銅組法具は、いわゆる種子鈴を含む遺品として、この種の法具中で重要である。本稿では組法具を構成する各法具の形式及び細部意匠を中心に考察し、その成立について検討した。

独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵・五鈷鈴を金剛盤に配置した唐招提寺組法具は、かねてよりその一具性について指摘があり、細部意匠の違いから、独鈷杵と三鈷杵、五鈷鈴（五種子鈴）と金剛盤を同工のものとし、五鈷杵は異なると考えられている。ここではまずこの問題について検証した。次に、組法具と形式や細部意匠の上で近親性が認められる作例として西大寺の組法具三件を取りあげ、両者を比較の上、同様の考察を行った。

その結果、両者には類似する細部意匠が認められるところから、唐招提寺の組法具は西大寺法具の影響を少なからず受けたものと推測できた。また、背景として、唐招提寺の再興事業と法会等について考察し、この組法具を十四世紀の製作であることを推定した。

キーワード…①密教法具 ②金剛杵 ③金剛鈴 ④種子鈴 ⑤唐招提寺

## はじめに

唐招提寺にはいくつかの密教法具が伝わっている。この度、唐招提寺当局のご高配と奈良国立博物館の協力を得て、これらの法具を調査する機会を得た。ついては、形式・細部意匠を主眼に、唐招提寺組法具の成立の背景を考察し、歴史的な位置づけを試みる。

### 第一章 唐招提寺の金銅組法具について

唐招提寺には、鎌倉時代の製作とされる独鈷杵(図1)・三鈷杵(図2)・五鈷杵(図3)・五鈷鈴(図4)・金剛盤(図5)より構成される金銅組法具(図6)(重要文化財)が伝来する。この組法具は以前から一具性について指摘があり、細部意匠の違いにより、独鈷杵と三鈷杵、五鈷鈴(五種子鈴)と金剛盤を同工のものとし、五鈷杵はさらに異なった環境での製作とする見方がある<sup>1)</sup>。

そこで改めて各法具の細部意匠に着目して考察を進める(表1)。独



図5 金銅金剛盤 鎌倉時代 唐招提寺



図1 金銅独鉈杵 鎌倉時代 唐招提寺



図2 金銅三鉈杵 鎌倉時代 唐招提寺



図3 金銅五鉈杵 鎌倉時代 唐招提寺



図6 金銅組法具 唐招提寺 鎌倉時代



図4 金銅五鉈五種子鈴 鎌倉時代 唐招提寺

鉈杵は、鉈部に比べ把部をわずかに長く作り、把の中央四方に、三重脷（ここでは便宜的に鬼目周囲の「括り」を「脷」と表記する）で正円形に近い鬼目を配し、間弁付きの重弁八葉（本稿では蓮弁が二枚のものを「単弁」、三枚に重なって見えるものを「重弁」と表記する。また蓮弁間に先端のみをみせるものを「間弁」とする）の蓮弁帯を連珠文帯で締め、蓮弁の先端に蕊を表す。三鉈杵の把も同様の形式であるが、脇鉈の基部に獅噛みを表すことを特徴とする。

これら二杵の鬼目や蓮弁帯の意匠に対して、五鉈杵は中央四方に配される鬼目が楕円形であり、重弁八葉の蓮弁帯を二線の約条で締め、脇鉈の基部には嘴形を表すことなどに違いがある。とくに蓮弁部分に、わずかに中央が膨らむむくりがあることも大きな違いであり、やはり二杵のそれとは異なる。

表 1 唐招提寺の金銅組法具

名称	鉢部	脇鉢の基部	蓮弁帯	把の中心	肩・種子帯の上	種子帯	種子帯の下	口縁部	法量
金銅五鉢五種子鈴	中鉢は脇鉢より長く、断面方形で下方に節をつくり、鬼目と中鉢の面の向きが一致する。	獅噛み	間弁付きの単弁を三線の約条で締める。	楕円形の鬼目	間弁付き重弁八葉の先端に蕊を表す。下部に子持ち紐帯を二組めぐらす。	種子帯を子持ち紐帯で区切り、金剛界五仏の種子を円相内の蓮華座上に表す。円相の間地は魚々子地とし、四弁花を中心とした宝相華文を飾る。	素文	素文	総高 19・4 鈴高 8・3
金銅独鉢杵	鬼目と鉢の面の向きが一致する。		間弁付きの重弁を連珠文帯で締める。	正円形に近い鬼目					総長 18・7 把長 6・8
金銅三鉢杵	中鉢は脇鉢より長く、断面方形で下方に節をつくり、鬼目と中鉢の面の向きは一致しない。	獅噛み	間弁付きの重弁を連珠文帯で締める。	正円形に近い鬼目					総長 18・6 把長 6・9
金銅五鉢杵	中鉢は脇鉢より長く、断面方形で下方に節をつくり、鬼目と中鉢の面の向きは一致する。	嘴型	間弁付きの重弁の二線の紐で締める。若干のむくりがある。	楕円形の鬼目					総長 18・4 把長 6・1
金剛盤									長径 26・4 短径 19・1 高 3・4

五鉢鈴は、鈴身に金剛界五仏の種子（梵字）を廻らしたいわゆる種子鈴に分類されるもので、鈴杵別鑄式の金剛鈴である。杵部は、中央四方に二重線の楕円形鬼目を配し、間弁付きの単弁八葉の蓮弁帯を子持ち三線（中央線が太く、この両側に細線を添えたものを「子持ち」と表記する）の約条で締め、脇鉢の基部に嘴形を表す。鈴身は肩からなだらかに降りて裾で急激に開く形で、肩には間弁付き単弁の蓮弁帯を廻らし、先端に蕊を表す。種子帯の上下には数条の圈線を表し、口縁部は素文である。種子帯には、五方に金剛界五仏の各種子を円相内の蓮華座上に表す。円相と円相の間地は魚々子地とし、四弁花を中核とする宝相華文を飾る。

これらの鈴杵を載せる金剛盤は、盤面の俯瞰形が建長二年（一二五〇）の京都・高山寺のものに近いが、側面観は正安二年（一三〇〇）の銘をもつ法隆寺の金剛盤と近似しており、製作年代も隔たりがないと考えられている<sup>22</sup>。二脚の足の前面に凹線があるところは西大寺や室生寺などの金剛盤にも見られる特徴である。

いずれにせよこれらの法具は鎌倉時代の特色を示し、全てが同時の製作でないものの年代に大差はないと考えられており、本稿でもその見解に異論はない。

種子五鉢鈴は金剛界五仏を表しているところに特色があり、その形式はいわゆる金剛界鈴に分類されるが、ここでは、唐招提寺鈴の意匠の特色を明確にするため、『密教法具』及び『密教法具（増補篇）』に所載のある、金胎両種の種子鈴の特徴を整理した（表2）。



図8 金銅五鈷四種子鈴  
鎌倉時代 細見美術館



図7 銅五鈷五種子鈴  
鎌倉時代 奈良国立博物館

一般的に、金胎の種子鈴は細部意匠の傾向から、金剛界系の法具は素文のものが多く(図7)、胎藏界系のものには装飾的なものが多いとされている(図8)。そして前者は五仏種子を、後者は大日如来を除く四仏種子を配当するものが多いことも相違する。金剛界鈴は、杵部の蓮弁帯が単弁八葉で、これを二線の約条で締め、鈴身部は種子を伴わない通形の金剛鈴と同様に、圏線を表し、口縁部を素文とする。また、無鍍金のももいくつか認められる。ただし金剛界鈴は、すべて

この意匠をもつものばかりでなく、次に記す胎藏界鈴の意匠をそのまま、または一部を受容した遺品もしばしば見られる。

これに対して胎藏界鈴は、総体に装飾的であり、杵部中央に鬼面を配し、上下に重弁八葉の蓮弁帯を施して、これを連珠文帯で締め、鈴身部は種子帯を連珠文帯で区切り、その上下に独鈷杵文帯、三鈷杵文帯を廻らせ、円相の間に宝相華文を表し、口縁部に蓮華座を具えるのがほとんどである。

上記の点を考慮すると、唐招提寺種子鈴は特殊な装飾を示す作例と考えることができる。すなわち同寺種子鈴は金剛界五仏を表した金剛界鈴に属するものの、円相の間地を魚々子地として四弁花を中心に展開する宝相華文を表す胎藏界種子鈴に一般的な装飾を施す点、蓮弁帯は単弁八葉で、これを二線の約条で締め、脇鈷の基部に嚙形を表すところはむしろ金剛界鈴と同様の形式を示す点である。つまり、金剛界鈴に胎藏界鈴の装飾の一部を取り入れた混淆例というべきものであることがわかる。

特に、種子を籠めた五方の円相の間地は、四方に配される胎藏界鈴のそれよりも面積が小さいにもかかわらず、四弁花を中心とした宝相華文を表しているが、その文様構成は胎藏界種子鈴に着想を得たであろうことが容易に知られ、このことは唐招提寺鈴の意匠の成立を考える上で留意しておくべきであろう。

以上、唐招提寺の組法具を構成する各法具の細部の特徴について述べた。次に、唐招提寺組法具を考える上で言及が不可欠と思われる西

大寺所蔵の組法具三件について考察したい。

## 第二章 西大寺の組法具について

西大寺には、多くの密教法具が伝存しているが、ここで考察の対象とするのは三件の組法具である。次に第一章に準じて、それらの組法具の細部意匠の特徴を見つめる(表3・4・5)。なお、括弧書きの各組法具の番号(その一～その三)は、『奈良六大寺大観 西大寺』に従う。

金銅組法具(その一)(図9・1)は、三杵(図9・2・3・4)と五鈷鈴(図9・5)・金剛盤(図9・6)より成る。鈴杵ともに銅鑄製で、黄色味の鮮やかな鍍金を施している。

金剛杵三杵の蓮弁帯がややむくり気味に作られていることや、扇形状に蕊をまとめて弁端部に表しているところが特徴的である。また、蓮弁帯の各弁の縁が僅かに重なっており、上の花弁を主弁とするならば、下の弁は間弁に相当するので、ここでは間弁付き重弁四葉としておきたい。この蓮弁帯の表現は、五鈷鈴のそれにも共通しているが、極めて珍しい意匠で注目される。他の細部意匠や技法も同工であるところから、鈴杵いずれも同時の製作のものと思われる。金剛盤には、鈴座や獣足を備えることからすでに胎蔵界の法具とする指摘がある。

金銅組法具(その二)(図10・1・2・3・4・5・6)は、『奈良六大寺大観 西大寺』においては、五鈷鈴を欠いた状態で載せられて

いるが、その後の『西大寺展』などの展観の際には五鈷鈴を加えた状態で展示されている経緯を踏まえ、本稿では五鈷鈴を完備した組法具として取り扱う。

五鈷鈴は鈴杵別鑄式で、鈴身は白銅製である。金剛鈴の遺品の中で五鈷鈴は最も数が多いが、杵部を金銅製、鈴身部を白銅製とする事例は極めて珍しい。独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵は、いずれも重弁八葉の蓮弁帯を連珠文帯で締めているが、五鈷鈴は重弁の蓮弁帯を飾るものの、素文二線の約条で締めている相違がある。このことから五鈷鈴は三杵とは、やはり本来別に用いられていたものと考えるのが妥当と思われる。

なお、三杵はいずれも黄色味の浅い鍍金が施されており、細部の形式・意匠からも見ても一具性を認めてよいであろう。(その一)や(その三)に比べ、鬼目の突出も弱く、蓮弁にむくりをほとんど取らない点で、この時代に一般的な金剛杵の形姿・細部意匠に最も近いものである。鈷と把の長さがほぼ同じであるところは古様を示すが、脇鈷が牛角状に曲がる作風から、(その一)とほぼ同時代の製作と見ることに異論はない。

白銅組法具(その三)(図11・1)は、独鈷杵(図11・2)、三鈷杵(図11・3)、五鈷杵(図11・4)、五鈷鈴(図11・5)、金剛盤(図11・6)、いずれも白銅鑄製とする珍しい遺品で、細部意匠の共通性から一具と考えてよいと思われる。間弁を入れた重弁八葉の蓮弁帯を連珠文帯で約し、鬼目は楕円形でやや突出する。とくに特徴的なのは、三

種子帯	種子帯の下	鈴身の口縁部	法量	【密教法具】 【密教法具(別冊増補篇)】の 図版番号
種子帯を三線の約条で区切り、円相内の蓮華座上に金剛界五仏の種子を表す。	素文	素文	総高 17・2 鈴高 7・7	16
種子帯を子持ち紐帯で区切り、円相内の蓮華座上に金剛界五仏の種子を表す。	素文	素文	総高 16・65 鈴高 7・3	17
種子帯を子持ち紐帯で区切り、円相内の蓮華座上に金剛界五仏の種子を表し、円相内は魚々子地とする。	素文	素文	総高 17・6 鈴高 7・8	18
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に金剛界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 20・0 鈴高 8・4	21
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に金剛界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 17・9 鈴高 8・0	22
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に種子ウーン字を四方に表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を素文とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 22・0 鈴高 8・9	25
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は素文として宝相華文を飾る。	間地を素文とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 20・6 鈴高 8・6	26
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 20・9 鈴高 8・6	27
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として簡略化した宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 21・5 鈴高 9・3	28
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として簡略化した宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	素文	総高 19・6 鈴高 8・2	29
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 21・9 鈴高 9・3	30-a
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 22・3 鈴高 9・3	30-b
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内の蓮華座上に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は素文として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 22・1 鈴高 9・2	31
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内に胎藏界四仏の種子を表す。円相の間地は魚々子地として宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 21・5 鈴高 9・0	32
種子を一線の紐で区切り、光背形の中の蓮華座上に種子ア字を五方に表す。胎藏界五仏を象徴か。	子持ち紐帯をめぐらす。	素文	総高 18・2 鈴高 7・6	33
蓮台上に種子イー字を五方に表す。	間地を素文とした三鈷杵文帯をめぐらす。	素文	総高 21・3 鈴高 8・6	34
種子帯を子持ち紐帯で区切る。円相内を魚々子地とし、蓮華座上に金剛界五仏の種子を表す。	石楠花を表した文様帯をめぐらす。	素文	総高 20・5 鈴高 9・4	増補 9
種子帯を子持ち紐帯で区切り、円相内に胎藏界四仏を表す。円相の間地は魚々子地として簡略化した宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	素文	総高 19・8 鈴高 8・7	増補 10
種子帯を連珠文帯で区切り、円相内に胎藏界四仏を表す。円相の間地は魚々子地として簡略化した宝相華文を飾る。	間地を魚々子地とした三鈷杵文帯をめぐらす。	蓮華座とし、上部に蕊を表す。	総高 21・4 鈴高 9・8	増補 11

表2 『密教法具』及び『密教法具(別冊増補篇)』所載の鎌倉時代に製作された種子鈴一覧

名称	所蔵	時代	脇鈴の基部	蓮弁帯	把の中心	肩・種子帯の上
金銅五鈷五種子鈴	大阪・藤田美術館	鎌倉時代	嘴形	間弁付き単弁八葉を二線約条で締める。	鬼目	間弁付き単弁八葉の先端に蕊を表し、下部に紐帯を表す。
銅五鈷五種子鈴	奈良国立博物館	鎌倉時代	嘴形	間弁付き単弁八葉を二線約条で締める。	鬼目	間弁付き単弁八葉の先端に蕊を表し、下部に紐帯を表す。
銅五鈷五種子鈴	岐阜・華嚴寺	鎌倉時代	嘴形	間弁付き単弁八葉を二線約条で締める。	鬼目	間弁付き単弁八葉の先端に蕊を表し、下部に紐帯を表す。
金銅五鈷四種子鈴	奈良国立博物館	鎌倉時代	龍頭	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に子持ち紐帯と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
銅五鈷五種子鈴	東京・山岡生銀衛氏	鎌倉時代	嘴形	間弁付き重弁八葉を三線約条と、鈴身と杵の継ぎ目は連珠文帯で締める。	四鬼面だが、うち一つに三面相を表す。	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を表す。下部に子持ち紐帯と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	神奈川・極楽寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に子持ち紐帯と、間地を素文とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	大阪・細見亮市氏	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に子持ち紐帯と、間地を素文とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	広島・厳島神社	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に子持ち紐帯と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	京都・醍醐寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	阿吽各二面の鬼面。	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に子持ち紐帯と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	愛知・岩屋寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	阿吽形、牙上出形と上下歯を揃えた四面鬼。	間弁付き重弁八葉の先端に蕊を二重に表す。下部に三線の約条と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	山形・法音寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	吽形の鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に三線の約条と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	山形・法音寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	吽形の鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に三線の約条と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	千葉・小網寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に子持ち紐帯と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
銅五鈷四種子鈴	和歌山・無量光院	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	吽形二面、牙上出形、一つは判然としない。	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に三線の約条と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷五種子鈴	東京国立博物館	鎌倉時代	嘴形	間弁付き単弁八葉を二線約条で締める。	鬼目	間弁付き単弁八葉の先端に蕊を表し、下部に子持ち紐帯をめぐらす。
金銅五鈷五種子鈴	京都・広瀬淑彦氏	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を二線約条で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉の先端に蕊を表し、間地を素文とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷五種子鈴	個人蔵	鎌倉時代	嘴形	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼面	間弁付き重弁八葉の先端に蕊を表し、下部に紐帯と石楠花を表した文様帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	群馬・長楽寺	鎌倉時代	嘴形	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	鬼目	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に一線の約条と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。
金銅五鈷四種子鈴	京都・泉涌寺	鎌倉時代	獅噛み	間弁付き重弁八葉を連珠文帯で締める。	阿吽各二面の鬼面	間弁付き重弁八葉に短い蓮弁を重ね、先端に蕊を二重に表す。下部に三線の約条と、間地を魚々地とした独鈷杵文帯をめぐらす。

表3 西大寺の組法具 (その一)

名称	鉦部	脇鉦の基部	蓮弁帯	把の中心	鈴身の肩	鈴身の側面	口縁部	法量
金銅五鉦鈴	中鉦は脇鉦より長く、断面方形で下方に節をつくり、脇鉦は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付き重弁四葉をもち連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	正円形に近い鬼目、三重輪。	間弁付き重弁四葉の蓮弁の先は翻転し、扇形状に蕊をまとめる。下部に紐帯を表す。	上下に連珠文帯を二線表し、その間に二線一組の紐帯を二条廻らす。	素文	総高 19・2 鈴高 8・7 口径 8・25
金銅独鉦杵	断面正方形で下方に節を表し、鉦の面と鬼目が一致しない。		間弁付き重弁四葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	正円形に近い鬼目、三重輪。				総長 17・5 把長 6・4
金銅三鉦杵	中鉦は脇鉦より長く、鉦の面は鬼目と一致しない。脇鉦は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付き重弁四葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	正円形に近い鬼目、三重輪。				総長 17・3 把長 6・2 鉦張 4・7
金銅五鉦杵	中鉦は脇鉦より長く、鉦の面は鬼目と一致しない。脇鉦は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付き重弁四葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	正円形に近い鬼目、三重輪。				総長 17・7 把長 6・2 鉦張 4・9
金剛盤								幅 28・9 奥行 20・8 高 4・4

表4 西大寺の組法具 (その二)

名称	鉦部	脇鉦の基部	蓮弁帯	把の中心	鈴身の肩	鈴身の側面	口縁部	法量
金銅五鉦鈴	中鉦は脇鉦より長く、断面方形で下方に節をつくり、脇鉦は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重輪。	間弁付き重弁八葉の先端に蕊を表す。	子持ち紐帯を二組表し、その上下に二線一組の紐帯を表す。中彫らみ気味である。	素文	総高 18・25 鈴高 7・8 口径 7・2
金銅独鉦杵	断面正方形で下方に節を表し、鉦の面と鬼目が一致する。		間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重輪。				総長 17・4 把長 5・8
金銅三鉦杵	中鉦は脇鉦より長く、鉦の面は鬼目と一致しない。脇鉦は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重輪。				総長 17・7 把長 5・9 鉦張 5・1
金銅五鉦杵	中鉦は脇鉦より長く、鉦の面は鬼目と一致する。脇鉦は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重輪。				総長 17・7 把長 5・7 鉦張 5・0
金剛盤								幅 25・4 奥行 17・4 高 3・7



表5 西大寺の組法具（その三）

名称	鉗部	脇鉗の基部	蓮弁帯	把の中心	鈴身の肩	鈴身の側面	口縁部	法量
白銅五鉗鈴	中鉗は脇鉗より長く、断面方形で下方に節をつくり、脇鉗は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重験。	間弁付き重弁八葉の蓮弁の先端に蕊を表す。	連珠文帯を二組表し、その上下に二線一組の紐帯を表す。中膨らみ気味である。	素文	総高 17・7 鈴高 7・2 口径 7・2 鉗張 4・8
白銅独鉗杵	断面正方形で下方に節を表し、鉗の面と鬼目が一致する。先端で急にすぼまる。		間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重験。				総長 16・6 把長 6・4
白銅三鉗杵	中鉗は脇鉗より長く、鉗の面は鬼目と一致しない。脇鉗は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重験。				総長 16・7 把長 6・0 鉗張 4・6
白銅五鉗杵	中鉗は脇鉗より長く、鉗の面は鬼目と一致する。脇鉗は牛角型を呈する。	嘴形	間弁付きの重弁八葉を連珠文帯で締める。若干のむくりがある。	楕円形鬼目、三重験。				総長 17・2 把長 6・0 鉗張 4・7
金剛盤								幅 26・8 奥行 18・0 高 4・0

杵ともに認められる蓮弁帯のつくりで、花卉に強いむくりをつけているところであろう。金剛盤は通形であるが、両脇の括れ部に猪目を透かさず、前面の二脚に縦の凹線、後ろの一脚に縦の凸線をつける。なお、この一具は、寺伝では観尊（興正菩薩）の所用とされ、鈴杵箱及び金剛盤の箱に記される墨書<sup>4</sup>にも、男山八幡宮における異国襲来御祈禱の際に興正菩薩が所持されたものとある。また、鈴杵箱の蓋裏には大永七年（一五二七）の貼紙墨書<sup>5</sup>があり、これらの法具の由緒を記している、この頃にこれらの鈴杵類が「東大寺新禪院住侶比丘長秀」の感得所持するところとなったことなどを記している。

鬼目や蓮弁帯の形式、手法から見ると、製作は鎌倉時代後半期と考えられるが、観尊所持の可否についてこれ以上わからない。また、この中の五鉗鈴は、その音色から「鈴虫」の別称がある。

中世の西大寺は観尊が入寺以降、復興が進められるが、観尊が醍醐寺出身で、密教を奉じたこともあって、密教法具の整備にも力が注がれた。『西大寺勅諭興正菩薩行実年譜』には、観尊が西大寺に還任した暦仁元年（一二三八）の翌年である延応元年条に、三密の壇供を構成え、中壇で「五大虚空藏法并駄都秘法」、東壇で「金剛界法」、西壇で「胎藏界法」を修したとある。仮にこの記事を事実と考えた場合、この時期までに法具が整備されていたはずであるが、今のところ該当する遺品は見出し難い。

むしろ西大寺に現存する法具類の製作について、従来留意されてきたのは、かつて同寺に伝来し現在は奈良国立博物館の所蔵となる金剛

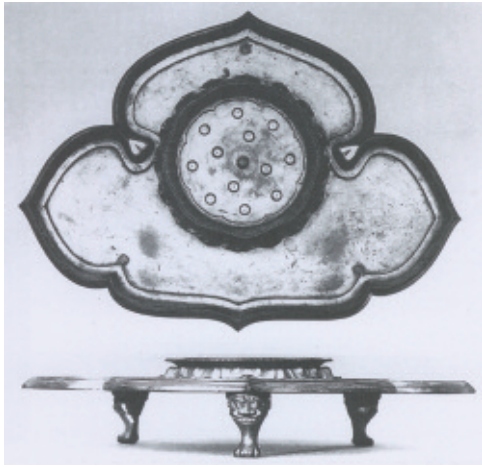


図9-6 金銅金剛盤 鎌倉時代 西大寺



図9-1 金銅組法具 鎌倉時代 西大寺



図9-5 金銅種子鈴  
鎌倉時代 西大寺



図9-2 金銅独鈷杵 鎌倉時代 西大寺



図9-3 金銅三鈷杵 鎌倉時代 西大寺

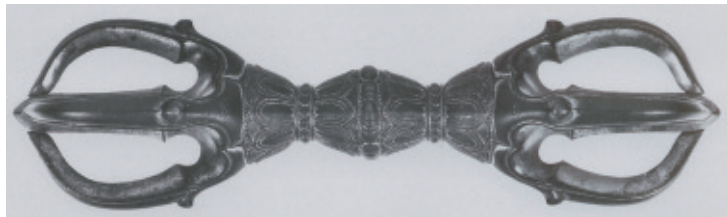


図9-4 金銅五鈷杵 鎌倉時代 西大寺

盤の存在である。この裏面には次のような刻銘がある。「西大寺 真言堂東壇仏具事／鈴卅五鈷三鈷独鈷 金剛盤／闍伽器四具四十 瓦坑四具四十／火舍四口在蓋甌 花瓶五口／灑水器一口在蓋 塗香器一口在蓋／輪一在座 羯磨四座在座／椀四本 香呂一枝／香宮一／念珠一連菩提子半裝束／磬台一在磬／正和三年甲寅六月六日記之正和三年一一三二一四の紀年とともに、大壇具（四面器）に相当する各法具類の記載に加え、「西大寺 真言堂東壇仏具事」とある。つまりこの刻銘に従えば、真言堂には「中壇」と「西壇」を加えた三壇構え（三密壇俱）の荘嚴がなされていたと考えるのが自然である。しかし『行実年譜』によれば、真言堂の造営は寛元三年



図10-6 金銅金剛盤 鎌倉時代 西大寺

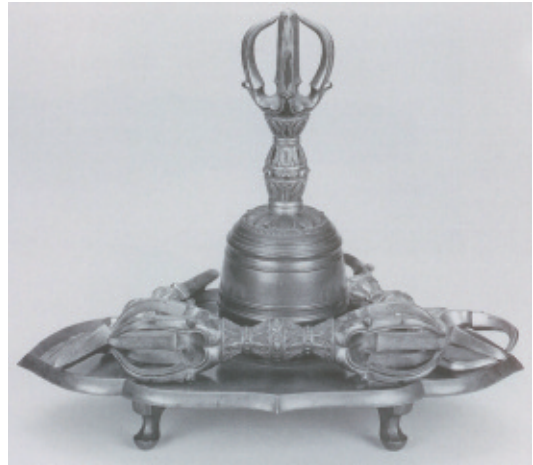


図10-1 金銅組法具 鎌倉時代 西大寺

図10-5 金銅五鉗鈴  
鎌倉時代 西大寺

図10-2 金銅独鉗杵 鎌倉時代 西大寺

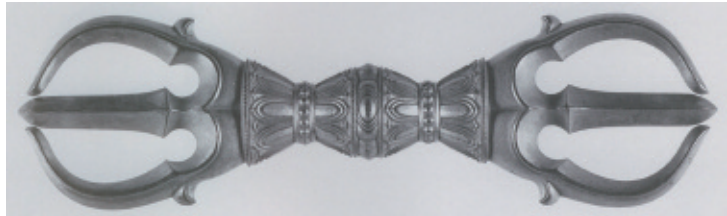


図10-3 金銅三鉗杵 鎌倉時代 西大寺



図10-4 金銅五鉗杵 鎌倉時代 西大寺

(一二四五)に遡り、前記金剛盤の紀年とは約百年の開きがある。この間の事情は不詳であるが、この記事に従えば、十三世紀の中葉頃にいったん法具の整備がなされていたと考えるのが穏当であろう。

ところで先述の通り、寛元時に遡る可能性のある金剛杵・金剛鈴を西大寺現存の遺品から見出すことは難しいが、現在藤田美術館の藏品となっている金銅独鉗杵(図12)については、従来あまり言及がない。同杵には「西大寺真言堂東壇」の針書き銘があり、すでに正和時の製作とする岡崎譲治氏の見方<sup>6)</sup>が出されているが、形姿や細部意匠を見ると若干の考察が必要と思われる



図11-6 白銅金剛盤 鎌倉時代 西大寺



図11-1 白銅組法具 鎌倉時代 西大寺



図11-5 白銅五鉈鈴  
鎌倉時代 西大寺



図11-2 白銅独鉈杵 鎌倉時代 西大寺

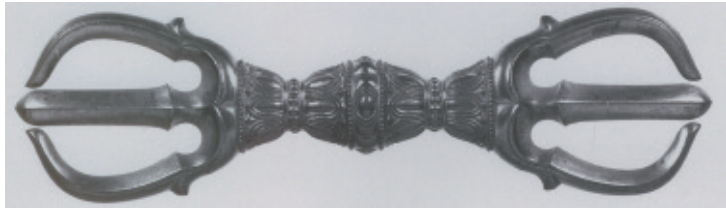


図11-3 白銅三鉈杵 鎌倉時代 西大寺



図11-4 白銅五鉈杵 鎌倉時代 西大寺



図12 金銅独鉈杵 鎌倉時代 藤田美術館

れる。

同杵は、鉦が細身で、先端まで鋭利に整えられ、把中央の鬼目は楕円形であるが、丸みを帯びて各目に盛り上がりを持たせている。蓮弁帯は間弁を入れた単弁八葉で、二線の約条で締める。岡崎氏も指摘されているが、蓮弁にはわずかにむくりがある。総長が二〇・六センチ、把長が六・二センチであるから鉦部が把部よりも一センチ程度長いことになる。「正和三年（一一三二）の紀年銘をもつ南都西大寺伝来の金剛盤（奈良国立博物館蔵）と具したものとされた岡崎氏は、おそらく蓮弁のわずかなむくりに着目し、製作年代を判じられたと思われるが、全体が細身で、鬼目の盛り上がり強く、また鉦も鋭利で把よりも長い形状には、むしろ十三世紀の半ば以前に遡る特色が顕著に出ていのではないだろうか。もしこの認識が許されるのであれば、正和時の真言堂法具整備には、寛元時の法具が前提にあったとも考えられるし、現存する西大寺法具に特徴的な鬼目部の盛り上がりや蓮弁のむくりは、形式の踏襲の中で保持されたと見ることも可能となろう。

以上、西大寺に伝存する三組の組法具と補足として藤田美術館蔵の独鉦杵について見てきた。西大寺の組法具については、とくに鬼目部の盛り上がり（突出）、および蓮弁帯に認められるむくりの表現を焦点として比較を行った。後者については、（その三）で顕著であり、これはこの組法具の大きな個性ともいえるものである。（その一）でもむくりは認められるが、この点は留意しておいてよいであろう。三組はあまり時を経ずに作られたと推定できるが、通形に近い（その二）

から個性的な（その三）まで、細部意匠には幅が認められる。

### 第三章 唐招提寺と西大寺の組法具の類似性について

唐招提寺の組法具に比較的近い細部意匠を示す作例として、西大寺の組法具三件を取りあげた。共通する形式的特徴を整理する。まず一具と考えられる唐招提寺独鉦杵・三鉦杵と西大寺杵では、独鉦杵において鉦面と鬼目の位置（方向）が一致しない点、また蓮弁帯のむくりと蕊の表現に違いがあるが、盛り上がった鬼目の形や全体の形姿は西大寺の（その一）の独鉦杵に近い。

五鉦杵は、蓮弁帯を二線の約条で締めることに大きな違いがあるが、鬼目の形やむくりのある蓮弁帯の表現は（その三）に類するものと考ええる。五鉦鈴については、西大寺の組法具は種子鈴ではないため細部意匠の比較は難しいが、いずれも鎌倉時代の特徴をよく表している。種子鈴の宝相華文に着目すると、円相の間地が狭いため四弁花も小さく全体的に簡略化されているものの、四弁花の左右の花弁の先が大きく下がらないところが醍醐寺の金銅五鉦四種子鈴のそれに通ずる。

西大寺の組法具については、正和三年（一一三二）の前後に、「真言堂」所用仏具の製作が盛んに行われ、現存品はこの前後に製作されたものとして先述したが、唐招提寺においても、以下の通り、ほぼ同時期に仏具・法具の整備が行われている。

平安時代後期には、都における密教が貴顕と結びつく中で、卑近な

現世利益を追求するあまり、本来の覚りを目指す高邁な目的を失って墮落し、南都における諸宗派も寺院間の対立や世俗的な争いにより疲弊していく。唐招提寺も平安末期にはかなり荒廃していたことがわかるが、このような状況の中で、戒律重視や釈迦信仰に重きをおいた南都仏教の復興を目指す動きが起こる。

まず興福寺を中心に、戒律を重要視した実範（生年不詳～一二四四）や貞慶（一一五五～一二一三）によって律宗の復興が進み、釈迦の教えに立ち返ることが叫ばれ、釈迦信仰が教化の中心となった。さらに、釈迦信仰は仏舎利信仰へとつながる。唐招提寺の復興は、まず実範が端緒となり、やがて鑑真請来の仏舎利が伝来する同寺は、まさにこうした信仰の拠点的性格を持つに至り、これを尊重して建仁三年（一二〇三）には、貞慶によって釈迦念仏会が始修された。

また、西大寺を本拠地として戒律の復興を進めた叡尊（一二〇一～一二九〇）は、建長元年（一二四九）、三国伝来の生身の釈迦と喧伝された清涼寺の釈迦像を模刻して同寺に安置し、やや遅れて唐招提寺においても正嘉二年（一二五八）に模刻像が造立された。こうした事業を契機として、十三世紀後半から十四世紀初めにかけて唐招提寺では、堂宇や仏像などの造営・修理が企てられ、宝治二年（一二八四）に戒壇堂を造立、東室・礼堂を再建、延元三年（一三三八）に金亀舍利塔が修理されている。また、現存する日供舍利塔、法会所用具、鼈太鼓縁・鉦鼓縁、輿などは、いずれも鎌倉時代のものと考えられ、舍利会の盛行に伴って整備されたものと考えられる。

唐招提寺において、密教法具が整備され、密教化された法会が行われたことは、これら組法具によって容易に推測されるが、その他、南都寺院において中世の密教関係遺品が伝存することについては法隆寺のいくつかの遺品が注意される。

まず、聖霊院伝来の黒漆華形大壇は、弘安七年（一二八四）の聖霊院再建に伴う一連の堂内具整備の中で製作されたもので、顕真を中心として一層進められた太子信仰の拠点としての聖霊院に大壇具が据え置かれたことは、真言密教と太子信仰の融合を示す点でも重要で、しかも顕真は、太子信仰を通じて叡尊と親交があったことも留意される<sup>9)</sup>。

また裏面に正安三年（一三〇〇）の刻銘をもつ金剛盤は、金堂内の地蔵の宝前に奉安されたもので、金堂という法隆寺中樞の堂宇に安置される地蔵関係の法会が密教修法によって行われていたことを暗示している<sup>10)</sup>。

いずれにせよ、上記で述べた唐招提寺復興の経緯を考慮すると、本稿で取りあげた組法具も、こうした南都の動向とほぼ同時期の仏具整備の流れの中で製作されたと考えることができる。とくに、唐招提寺法具は、西大寺真言堂の仏具整備の中で製作された三件の組法具とほぼ同様の環境で製作されたものと考えられる点は、中世における両寺の営みを考察するうえでも興味深い。

## おわりに

本稿では、まず唐招提寺の組法具について細部意匠を整理し、その製作の背景について若干の考察を行った。従来の説に従って、形式・意匠面の差異を整理し、一具性は認められないことを確認した。

次に、形式に近親性が認められる西大寺の法具三件を同様に唐招提寺の作例と比較・考察した。その結果、類似する形式的な特徴と細部意匠を見出すことができ、西大寺の法具が唐招提寺の法具に影響を与えたことが推測できた。さらに、西大寺と唐招提寺の法具整備の時期はほぼ一致しており、唐招提寺舍利会をはじめとする法会の盛行に至る経緯のなかで製作されたと見られ、概ね十四世紀のものと推定できた。

また、特に唐招提寺組法具の種子鈴や西大寺組法具（その一）はその形式についてさらなる検討が可能であることがわかった。今後はより細部に目を向けた考察が必要である。

## 注

- (1) 奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観 第十二巻 唐招提寺 一』（岩波書店、一九六九年）
- (2) 注1と同じ、および奈良国立博物館編『密教法具』（講談社、一九六五年）
- (3) 岡崎譲治「種子鈴考 金剛界鈴と胎藏界鈴」（『仏教芸術』七十一号、毎日新聞社、一九六九年）、関根俊一「金剛鈴と金剛杵」（『日本の美術』

五四一号、至文堂、二〇二一年）

- (4) 「鈴杵箱蓋裏押紙第一紙墨書」（奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 第十四巻 西大寺 全』岩波書店、一九七三年）
- 鈴。五鈷。三鈷。独股

右。四種者。興正菩薩異國襲来／御祈禱之時。於城州男山八幡宮。御修法中壇之鈴杵也。委細ノ由来／此書付ノ下ニ在之。西大寺常住。

- (5) 「鈴杵箱蓋裏押紙第二紙墨書」（奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 第十四巻 西大寺 全』岩波書店、一九七三年）

右。此鈴杵者毘尼再興之宗師興正菩薩。依輪言為西夷調伏。愛染護尸ノ一万座。於于城州男山八幡宮勤修之砌。課工人鑄冶之。令安置中壇。未吐ノ結願之言。本尊之御手矢虚空飛往西夷之陳。蛮軍悉亡。重無ノ来。自尔以来。一天泰平四海無事也。然即鎮護国家之靈宝。此金剛杵最尊ノ第一也。仍西大寺累代師資相承日々新。然今有不思議幸縁。令感得ノ秘藏無極。是併染王教示之愛法。牟尼授与戎珠也。然則跡嚴先師ノ聖秀禪室倍開山中道灯。開高祖聖跡之壇。登一印大覺位。振此金剛ノ鈴杵。驚彼両部万茶之諸尊。瑜伽灌頂智水。普灑八家三千心地法ノ界宮。惠日遠曜及竜花三会朝。我願是如。聖衆加護給。

于時大永七年<sup>考</sup>。令感得之。和州南都東大寺新禪院住侶比丘長秀所持之。

- (6) 奈良国立博物館編『密教法具』（講談社、一九六五年）

- (7) 「平安・鎌倉時代の金剛杵―密教法具の細部形式―意匠に関する基礎的研究 その一」（『日本文化史研究』三十二号、帝塚山大学、二〇〇〇年）

- (8) 注1と同じ

- (9) 関根俊一「法隆寺の近世密教関係遺品（一）」（『奈良学研究』三号、帝塚山大学、二〇〇〇年）なお、大壇天板裏面の墨書銘は以下の通り。「奉

安置 聖靈院華形マド檀／右志者為祈悲母幽靈之／得脫漸以彼五句之仏事用  
途為其濫觴乃至勸進十方檀那忽終／功所奉安置彼靈場也雖事是輕微願  
尤莫大也是以太子聖靈願哀愍念且備／是於広恩報謝勝業且擬是於拔苦  
与樂之／仏□□□□悲母□□□□□□□□□□／今比微功必遂生々  
世々太子值遇／之望乃至功德無限普及法界群類速萌一仏／浄土之即共進  
無上菩提之果矣 正応二年歲次己丑六月日 勸進慶舜大法師  
(10) 裏面刻銘「奉施入法隆寺金堂／後戸地藏尊／正安二年子庚八月日／僧教仏

【後記】調査には、唐招提寺当局のご高配を得て、現在の寄託先である奈良国立博物館において、同館工芸考古室長清水健氏、同室研究員田澤梓氏の協力のもと、奈良大学文化財学科の関根俊一教授とともに行った。末筆ではあるが、記して深甚の謝意を表します。

【唐招提寺組法具法量一覽】

○金銅独鉢杵

総長 十八・七 cm 鉢長 五・〇 cm 把長 六・八 cm

蓮弁帯 二・八 cm 連珠文帯の経 一・六 cm 鬼目帯 〇・八 cm

鬼目帯の経 二・二 cm

○金銅三鉢杵

総長 十八・六 cm 鉢長 五・八 cm 把長 六・九 cm

蓮弁帯 三・二 cm 連珠文帯の経 一・七 cm 鬼目帯 〇・八 cm

鬼目帯の経 二・八 cm 鉢の張り 五・四 cm

○金銅五鉢杵

総長 十八・四 cm 鉢長 六・四 cm 把長 六・一 cm

蓮弁帯 二・八 cm 紐帯の経 一・七 cm 鬼目帯 〇・七 cm  
鬼目帯の経 二・七 cm 鉢の張り 四・九 cm

○金銅五鉢五種子鈴

総長 十九・五 cm 鉢長 六・〇 cm 把長 五・二 cm

蓮弁帯 二・七 cm 紐帯の経 一・四 cm 鬼目帯 〇・八 cm

鬼目帯の経 三・二 cm 鉢の張り 五・五 cm 口径 八・四 cm

○金銅金剛盤

幅 二十六・四 cm 奥行 十九・一 cm 高三・四 cm

縁の厚み 〇・六 cm

図版出展

図1・2・3・4・5・6・7・8・9・6・12 奈良国立博物館編『密教法具』  
(講談社、一九六五年)

図9・1・9・2・9・3・9・4・9・5・10・1・10・2・10・3・10・4・10・  
5・10・6・11・1・11・2・11・3・11・4・11・5・11・6 奈良国立博物館編

『密教法具(別冊増補篇)』(臨川書店、一九九三年)

Ritual Implements for Esoteric Buddhism of Tōshōdaiji

Asakaze Hara